

国立国会図書館



図書館を「見える化」する レファレンス協同データベース事業

これからの図書館のあり方を検討するために

図書館利用者の情報行動の傾向及び図書館に関する意識調査

世界図書館紀行 オーストラリア ビクトリア州立図書館

2015.6
No. 650

国立国会図書館利用案内

東京本館

所在地 〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話番号 03(3581)2331
利用案内 03(3506)3300(音声サービス)
ホームページ <http://www.ndl.go.jp/>
利用できる人 満18歳以上の方
ただし、満18歳未満の方には、個別に相談に応じています。詳しくはホームページをご覧ください。
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料 和洋の図書、和雑誌、洋雑誌(年刊誌、モノグラフシリーズの一部)、和洋の新聞、各専門室資料

サービス時間

開館時間	月～金曜日 9:30～19:00 土曜日 9:30～17:00 ※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の開室時間は17:00までです。	即日複写受付	月～金曜日 10:00～18:00 土曜日 10:00～16:00
資料請求受付★	月～金曜日 9:30～18:00 土曜日 9:30～16:00 ※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の資料請求時間は16:00までです。	後日郵送複写受付★	月～金曜日 10:00～18:30 土曜日 10:00～16:30

★登録利用者限定のサービスです。

■見学のお申込み／国立国会図書館 利用者サービス部 サービス運営課 03(3581)2331 内線25211

関西館

所在地 〒619-0287 京都府相楽郡精華町精華台8-1-3
電話番号 0774(98)1200(音声サービス)
ホームページ <http://www.ndl.go.jp/>
利用できる人 満18歳以上の方
ただし、満18歳未満の方には、個別に相談に応じています。詳しくはホームページをご覧ください。
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料 和図書・和雑誌・新聞の一部、洋雑誌、アジア言語資料・アジア関係資料(図書、雑誌、新聞)、科学技術関係資料、文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書、博士論文

サービス時間

開館時間	月～土曜日 10:00～18:00	即日複写受付	月～土曜日 10:00～17:00
資料請求受付★	月～土曜日 10:00～17:15	後日郵送複写受付★	月～土曜日 10:00～17:45
セルフ複写受付	月～土曜日 10:00～17:30	★登録利用者限定のサービスです。	

■見学のお申込み／国立国会図書館 関西館 総務課 0774(98)1224 [直通]

国際子ども図書館

所在地 〒110-0007 東京都台東区上野公園12-49
電話番号 03(3827)2053
利用案内 03(3827)2069(音声サービス)
ホームページ <http://www.kodomo.go.jp/>
利用できる人 どなたでも利用できます。
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 月曜日、国民の祝日・休日(5月5日こどもの日は開館)、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
※第一・第二資料室は、休館日のほか日曜日に休室します。メディアふれあいコーナーと本のミュージアムは、行事等のため休室することがあります。
おもな資料 国内外の児童図書・児童雑誌、児童書関連資料

サービス時間

開館時間	火～日曜日 9:30～17:00	※1階子どものへや、世界を知るへや、3階メディアふれあいコーナー、本のミュージアムの利用時間は、開館時間と同じく9:30～17:00です。		
第一・第二資料室の利用時間	閲覧時間	火～土曜日 9:30～17:00	資料請求受付	火～土曜日 9:30～16:30
複写サービス時間	即日複写受付	火～日曜日 10:00～16:00	後日郵送複写受付	火～日曜日 10:00～16:30
	複写製品引渡し	火～日曜日 10:30～12:00 13:00～16:30		

■見学のお申込み／国立国会図書館 国際子ども図書館 03(3827)2053 [代表]

C O N T E N T S

- 02 懸賞募集綴帳図案集 実用・工芸・広告の三位一体
今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から
- 04 図書館を「見える化」する レファレンス協同データベース事業
- 13 これからの図書館のあり方を検討するために
図書館利用者の情報行動の傾向及び図書館に関する意識調査
- 20 世界図書館紀行 オーストラリア ビクトリア州立図書館
- 28 国立国会図書館の平成27年度予算

12 館内スコープ
未来のウェブにつながる仕事です

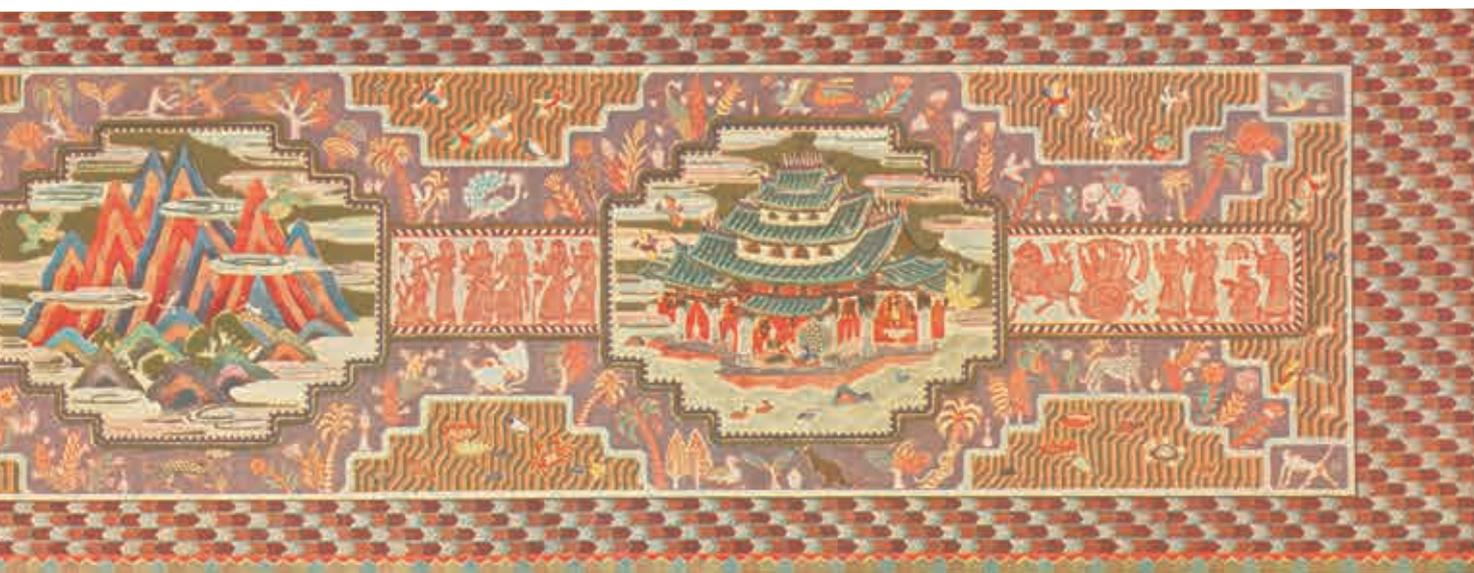
27 本屋にない本
○「The Leica ライカの100年」

30 NDL NEWS
○法規の制定
○第25回納本制度審議会

32 お知らせ
○新刊案内 国立国会図書館の編集・刊行物

懸賞募集緞帳図案集 実用・工芸・広告の三位一体

伊藤 りさ



緞帳図案集：歌舞伎座緞帳懸賞図案 伊東胡蝶園広告部，丸見屋商店広告部編 芸艸堂
昭和4年 図版22枚；33×49cm <請求記号 寄別7-6-1-5>

最初にちょっとしたなぞなぞを。

「劇場の舞台上、すべての観客席から見るところにあるのに、上演中は決して観客の目に触れないものはなに？」

答えは「^{どんちよう}緞帳」（当てはまるものはほかにもあるかもしれないが…）。緞帳の役割は舞台と客席を仕切ることだが、豪華な意匠で場内の雰囲気盛り上げるなど、劇場には欠かせない装飾でもある。だがそれだけではない。緞帳はほかにも重要な仕事をしている。それは「広告」である。

今回紹介するのは、歌舞伎に絡んだ媒体を駆使して宣伝活動を展開した丸見屋商店と伊東胡蝶園による「緞帳図案懸賞募集」の当選図案集である。伊東胡蝶園は、明治時代に、日本初の使用に耐える無鉛白粉^{み そのおしろい}「御園白粉」を製造した化粧品会社であり、丸見屋商店は大正14（1925）年まで総代理店だった。開発の経緯に鉛中毒で苦しんでいた歌舞伎俳優が

関わっていたこともあってか、御園白粉と歌舞伎との縁は深かった。俳優による化粧談を新聞広告として掲載したり¹、御園化粧品の土産付き観劇会を開催したり、松竹系劇場の筋書（プログラム）に載っている「俳優楽屋話」というコーナーにさり気なく（もないが）商品の宣伝（[図1参照](#)）を紛れ込ませるなど²、歌舞伎とタイアップした宣伝活動が種々行われている。

緞帳図案の懸賞募集も、それら歌舞伎絡みの宣伝活動の一つとして企画されたものと思われる。「懸賞募集」の広告自体が宣伝になるのはいうまでもないが、日々観客の目に触れる緞帳そのものも巨大な広告である。大正14年の新聞³に掲載された歌舞伎座の緞帳の写真には、中央下部に麗々しく「御園白粉」と大書されている。

当館では、昭和2（1927）年と昭和4（1929）年に行われた緞帳図案懸賞募集の当選図案集

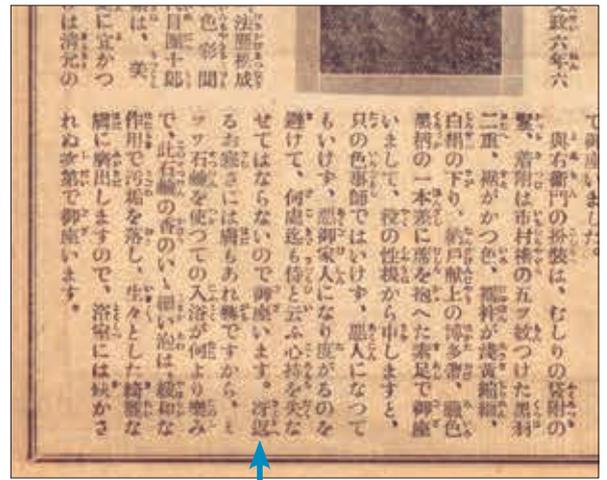
1 伊東栄「父とその事業」伊東胡蝶園 1934

2 戸板康二「ミツワ文庫」『ロビーの対話』（三月書房1978）所収

3 「東京朝日新聞」大正14年1月6日（夕刊）。広告のタイトルは「歌舞伎座初開場と御料御園白粉の緞帳」。



緞帳図案集：明治座緞帳懸賞図案 丸見屋商店広告部編 芸艸堂
昭和2年 図版30枚；33×51cm <請求記号 417-45 >



◀「明治座緞帳懸賞当選図案」は2種類を所蔵している。こちらは、1ページに2図案を掲載しており、簡略な印象。「はしがき」は同内容。
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1150563/1>

▶図1 歌舞伎座、大正15年2月の筋書に掲載された「俳優楽屋話」（市村羽左衛門）にあるミツツ石鯨の宣伝。宣伝へのつなげ方にいささか無理が感じられる。『大正十五年歌舞伎座二月興行』<請求記号 Y93-G124 >



を所蔵している。図案募集は、新聞広告などで確認できた限りでは少なくとも4回は実施されたい（大正12（1923）年歌舞伎座〔関東大震災で中止になり、同13年再募集〕、大正13（1924）年新橋演舞場、昭和2年明治座、昭和4年歌舞伎座）が、他の2回で同様の図案集が作成されたのかは不明である。審査員には日本画家の川合玉堂、鍋木清方、平福百穂ら錚々たる顔ぶれが並んでいる。大正13年新橋演舞場と昭和4年歌舞伎座の際は、ごく短期間ながら優秀図案の展覧会も開催されたようだ⁴。

自身も緞帳を多数デザインした染織作家の寺石正作氏によると、芹沢銈介の経歴書に「歌舞伎座緞帳応募図案は、大正12年関東大震災のため、進行中の図案製作中止と記してある」⁵とのことで、もし関東大震災がなければ、歌舞伎座に芹沢銈介画の緞帳がかかっていたかもしれない。

大劇場で、現在のような上下に開閉する緞帳が用いられたのは、明治12（1879）年の新富座が始まりと言われている⁶。現在よく見られる緞織の緞帳が最初に使用されたのは昭和26（1951）年、大阪・朝日会館とのことで、それまでは手描き、刺繍、アップリケなどの手法で製作されていた。つまり、今回紹介した緞帳図案は緞織ではなく、刺繍や手描きなどで製作されることを前提にデザインされているということだ。そう考えると、現在の緞帳とは意匠や絵柄がやや異なるように感じられるのも当然かもしれない。

優れた伝統の技術で織り上げられる緞織緞帳は美術工芸品といえるが、実は、舞台と客席を仕切る幕にこれだけの情熱を傾けるのは日本だけらしい⁷。次に劇場に足を運んだときは、日本文化としての緞帳にも目を向けてみたい。

（いとう りさ 利用者サービス部人文課）

4 「東京朝日新聞」大正14年4月19日（夕刊）、「読売新聞」昭和4年4月18日、など。

5 寺石正作「緞帳物語」染織と生活社 1995。ただし、新聞広告によると、締切期日は8月31日となっている。

6 長瀬稔「日本における緞帳の歴史」『全国公文協通信』20（1996.7.20）

7 「歌舞伎いろは 歌舞伎の逸品を手に入れる～織物編～」歌舞伎美人<<http://www.kabuki-bitto.jp/special/tepeco/42/>>

「スープの冷めない距離」という言葉の語源を知りたい

各国の割り算の方法について知りたい

犬養毅の肖像写真を探している

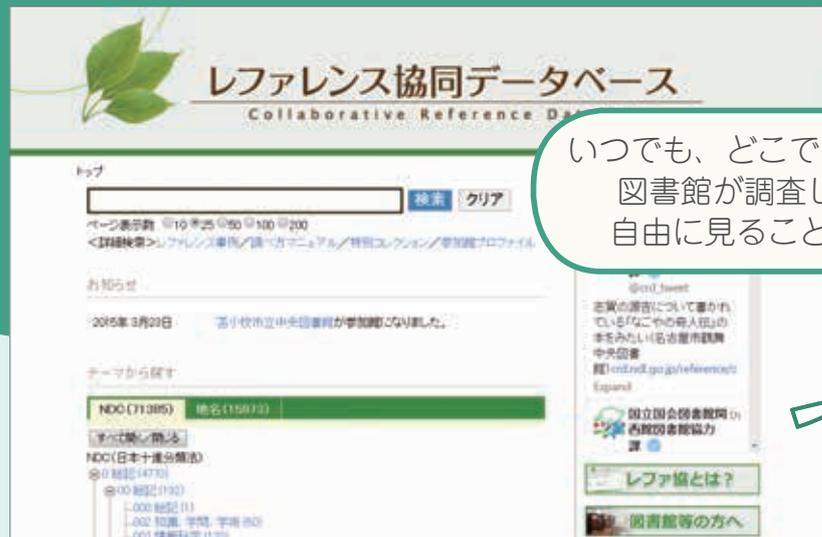
図書館を「見える化」する！

レファレンス 協同データベース事業

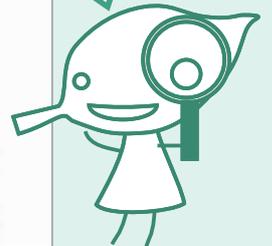
ディスコの踊り「パラパラ」の語源を知りたい

世界で一番短い手紙は、いつ、どこで書かれたか

日本最古の広告は何かを知りたい



いつでも、どこでも、どなたでも、
図書館が調査したデータを
自由に見ることができます。



レファレンス協同データベース（略称：レファ協）は、事業に参加している図書館等が日々行っている調べものの記録などを登録し、そのデータを、国立国会図書館がインターネットを通じてみなさんに提供する事業です。図書館の知識が集まったこのデータベースを使って、日常生活でふと感じた疑問からビジネスや調査研究に関する専門的なものまで、幅広いデータをご覧いただけます。

データベースの公開からちょうど10年になる今年、「つながる図書館の情報サービス：『調べる方法』の公共性」をテーマとしてフォーラムを開催しました。今回はこのフォーラムの内容とあわせ、レファ協の事業について紹介します。

（関西館図書館協力課）

「今どきの若いものは…」という文章が、古代遺跡から発見されたいが、それはどこの遺跡か？



事業について

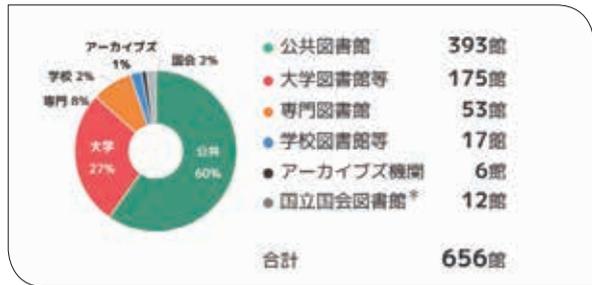
図書館が行うサービスの一つに、レファレンスサービスがあります。図書館等の職員が利用者の調べものや資料・情報検索を助けるサービスです。レファ協は、全国の図書館等のレファレンスサービスに関するデータを国立国会図書館で蓄積し、インターネットを通じて提供することによって、レファレンスサービスや一般利用者の調査研究活動を支援する事業です。

事業に参加してデータを提供している機関（参加館）は、全国の公共図書館、大学図書館、専門図書館、学校図書館のほか、公文書館などのアーカイブズ機関で、都道府県立の図書館から職員一人で運営している館まで規模も様々です。地域、館種、規模を問わず、様々な機関が「協同で」一つのデータベースを作っているということがレファ協のいちばんの特徴といえます。

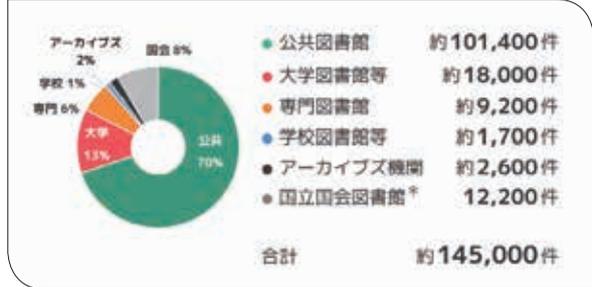
平成27年3月末現在、参加館数は656館、登録されているデータ数は約14万5千件です。14万5千

件の約6割である8万3千件が一般公開されており、どなたでもインターネットで見ることができます。登録データへのアクセスは年々増えており、平成26年は平均して月に約176万件、1日平均約5万8千件のアクセスがありました。

館種別の事業参加館数（平成27年3月末現在）



館種別のデータ登録件数（平成27年3月末現在）



*国立国会図書館には支部図書館も含む

レファ協とは



「…図書館等における…データを蓄積し、並びにデータをインターネットを通じて提供することにより、図書館等におけるレファレンスサービス及び一般利用者の調査研究活動を支援する事業」（事業実施要項から抜粋）

レファ協イメージキャラクター

れはっち

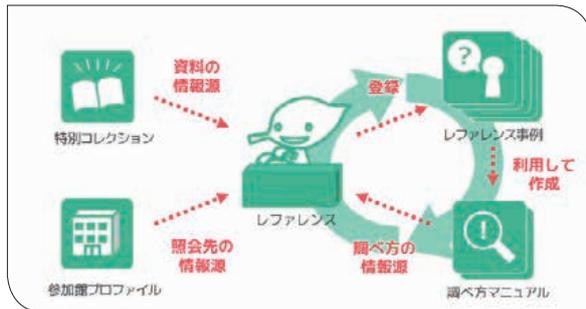


はじめまして！
レファ協のゆるキャラ
れはっちです。葉っぱ
をモチーフにして作っ
てもらいました。



レファ協に収録されているデータについて

レファ協に収録されているデータは、①レファレンス事例、②調べ方マニュアル、③特別コレクション、④参加館プロフィールの4種類です。これら4種類のデータが連携することによってデータ登録のサイクルを生み出すようになっています。



レファレンス事例

「レファレンス事例」は参加館で行われたレファレンスサービスの記録です。レファ協では、利用者が何らかの情報または資料を求めて職員に寄せた質問を、レファレンス質問と位置づけ、すべて収録の対象としています。

レファレンス事例データは「質問」や「回答」だけでなく、調査の過程を記録した「回答プロセス」や回答の根拠となった「参考資料」などの情報を記載するようになっており、調査の過程を確認できるようになっています。

レファレンス事例データ

提供館 (Library)	国立国会図書館 (National Diet Library) (1110001)		
事例作成日 (Creation date)	2005/08/28	登録日時 (Registration date)	2005年12月07日 02時11分
質問 (Question)	12年前前に読んだ想像上の生き物の絵本(イラストが左、解説が右に分けて書いてあり、本のすきまに住むものや、自転車に乗った人間大のえんぴつ男が載っている)について (1)『大千世界の生き物たち』スズキコージ作 東亜社 1994.5 71枚(請求記号Y18-9114) p.29に「ペントロンザ」という自転車に乗ったえんぴつ男の怪物を描載 p.88に「スキママン」という本のすきまに住みつく生き物を描載 ページの左側が解説、右側がイラスト(お探しの資料と逆) この資料のあとがきに「すでに絶版になっていた『大千世界のなかもたち』(福音館書店)の裏に初期の形、月刊誌『子どもの鏡』(福音館)に長期連載されていた『大千世界の生き物たち』を、ほぼ当時の絵と原文のまままで出版した旨の記述があります。内容を確認しましたところ、「大千世界のなかもたち」がお探しの資料に近いと思われるのでご紹介いたします。 (2)『大千世界のなかもたち』スズキコージ著 福音館書店 1995.11 83p(請求記号Y8-2892) p.4-5に「スキママン」という本のすきまに住みつく生き物を描載 p.36-37に「ペントロンザ」という自転車に乗ったえんぴつ男の怪物を描載 ページの右側が解説、左側がイラスト(お探しの資料と同じ) (参考)『大千世界の生き物たち』、『子どもの鏡』福音館書店 8巻6号(昭和55年6月)～11巻3号(59年3月)(請求記号Z13-1277)上記期間毎月数ページの連載あり。		
回答 (Answer)			
回答プロセス (Answering process)	NDL-OPAC(http://www.opac.ndl.go.jp/index.html)を、タイトルを「いきもの」、請求記号を「Y18+」(絵本の分類)、出版年を「1995年まで」と入力して検索し、ヒットした資料を確認しましたところ、(1)の資料にたどり着きました。この資料のあとがきに「すでに絶版になっていた『大千世界のなかもたち』(福音館書店)の裏に初期の形、月刊誌『子どもの鏡』(福音館)に長期連載されていた『大千世界の生き物たち』を、ほぼ当時の絵と原文のまままで出版した旨の記述があります。内容を確認しましたところ、「大千世界のなかもたち」がお探しの資料に近いと思われるので(2)の資料もご紹介いたします。		
事例ID (ID)			
参照 (Ref)			

質問と回答だけでなく、レファレンスの「回答プロセス」もわかるんだね

「レファレンス事例」の例

- ・「この道をいけばどうなるものか」から始まる言葉の全文が知りたい。良寛の言葉らしい。【福井県立図書館】
- ・「情報化社会」というテーマでじっくり調べられる資料がほしい。選択授業での調べ学習のための資料。【神奈川県立図書館員研究会】
- ・中学校の数学で統計の授業を行うにあたって、版も全く同じ辞書が多数ほしい。【東京学芸大学学校図書館運営専門委員会】
- ・どうして、人間ができたのか？(3年生児童の記述そのままに)【京都女子大学附属小学校図書館】
- ・ツバメが怪我をして飛べないでいる。どうしたらいい？【能代市立図書館】
- ・持ち込んだノート等を図書館のコピー機でコピーできないのはなぜか？【香川県立図書館】





「質問」と「回答」をつなぐ調査の過程を知ることができれば、その「回答」がどのような情報源に基づいているのかを確かめ、どれだけ信憑性があるかを判断できます。また、この過程には、図書館員が使う調べものに役立つ資料や調査のコツなど有益な情報も含まれています。たとえば「〇〇という地名の由来は何か」という質問に対する回答は「△△という地名の由来」を探している方には、直接役には立ちません。しかし、〇〇という地名を調べるのに使用した事典が、△△という地名の由来を調べるのに役立つことは十分に考えられます。このように、レファレンス事例には別の調査に応用可能なヒントがたくさんつまっています。



調べ方マニュアル

「調べ方マニュアル」は、特定のテーマやトピックに関する情報源や調べ方をまとめたものです。調査テーマについてまず押さえるべき基本的な情報源は何かを知ることができます。

「調べ方マニュアル」の例

- ・レポートの書き方の本・発想法の本（高校生向き）／情報検索オリエンテーションの参考資料【神奈川県学校図書館員研究会】
- ・「コピー元」の調べ方【近畿大学中央図書館】
- ・調べ方の近道案内 20 環境教育について調べるには～社内研修のために～【福岡県立図書館】
- ・写真を探す（日本）【国立国会図書館】

特別コレクション



「特別コレクション」は〇〇文庫や□□関連資料、△△コーナーなど、特定のテーマや資料の種類に着眼し、他の資料とは区別して所蔵しているコレクションに関する情報です。各コレクションにどのような資料が集まっているかという「内容」や、複写の可否などの「利用条件」等が記載されています。各図書館等の特別コレクションには、最近ではデジタル化されている資料も少なくないので、ここを窓口として資料にアクセスすることも可能です。

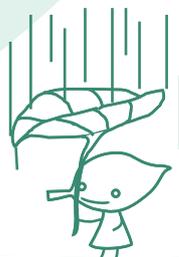
「特別コレクション」の例

- ・震災文庫（阪神・淡路大震災関係資料文庫）【神戸大学附属図書館】
- ・東京文化会館公演プログラム【東京文化会館音楽資料室】
- ・神戸賀川サッカー文庫【神戸市立中央図書館】
- ・被爆体験証言ビデオ【広島市立中央図書館】
- ・絵図の世界（デジタルアーカイブ）【愛知芸術文化センター愛知県図書館】



参加館プロフィール

「参加館プロフィール」は、各参加館に関する情報です。「レファレンス事例」、「調べ方マニュアル」、「特別コレクション」のデータとリンクしていて、各図書館等への案内の窓口の役割を果たしています。



レファ協の活用法

従来、レファレンスサービスの記録は紙の管理簿で行われてきました。紙はだれでも書きやすい反面、作成しても後で探しにくく、活用がしやすい形とはいえません。一方、レファ協のようにデータで記録が残っていると探しやすく、簡単に参照することができます。

ここでは、多くのデータを蓄積することで、可能になった、新たな活用法をご紹介します。

「逆引き」で広がるデータの可能性

通常は「調べたいテーマ」から「関連する資料(情報)」を探すことが多いレファ協ですが、切り口を変えることでいろいろな有用な情報を引き出すこともできます。

たとえば、気になる本やデータベースの名称でレファ協を検索すれば、それらがどのような場面で役立つ資料なのかを知ることができます。購入すべきか迷っている本のタイトルでもよいですし、あるいは自分が関係した出版物やウェブサイト、お勤めの企業・機関の名前で検索してもよいかもしれません。質問者と図書館等のやり取りの中で生まれた数々の事例は、書籍販売サイトのレビューとは一味違った情報を提供してくれることでしょう。

データでつなげる、データがつながる

従来、レファレンスの記録はそれぞれの図書館等でバラバラに蓄積されていましたが、レファ協という一つの場にデータが集まることで生まれるメリットもあります。たとえば「図書館員が調べた京都のギモン～京都レファレンスマップ～」(ししょまろはんラボ)では、あちこちの図書館に寄せられた質問の中から

京都に関する事例だけを集約し、経度や緯度を付加して地図上で見られるようにしています。地図上に落とし込むことで、文字だけを見てはわからなかったデータとデータの関係を知ることができます。

また、レファ協ではAPIも提供しています。APIを利用することで、たとえば、レファ協に集約されたデータを図書館の蔵書検索システムの検索対象とすることもできます。タイトルや出版年といった情報だけではそれがどんな本なのかわかりにくいですが、その本が活用されたレファレンス事例と一緒に見ることができれば、どんな時にその本が役に立つのかを知ることができます。

このように、一つ一つのデータを見ているだけではわからなかったことも、たくさんの情報が集まることで、また、他の情報と結び付けることで、新たな価値を発見することができます。



図書館員が調べた京都のギモン
～京都レファレンスマップ～

<http://libmaro.kyoto.jp/?p=165>

地図上でレファレンス事例を見られるだけでなく、付加した経緯度のデータも公開されており、さらに活用できる仕組みになっています。





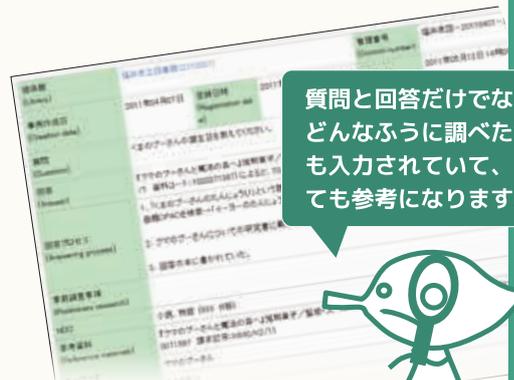
図書館員ならではの 活用法も！

自己研さんや研修に使えます！

実践的な事例がたくさん！

レファ協に登録されたデータは、どれも図書館の現場で作成された実践的な内容のものばかりです。事例を読んだり、再調査することで、スキルアップを図ることができます。

また、どんな質問が多いか、どんな資料が使われているかを事例から読み取り、資料の収集や排架といった図書館運営の参考情報として利用することができます。



質問と回答だけでなく
どんなふうに調べたかも
入力されていて、とても
参考になります。



参加館になるとこんなメリットもあります！

全国の図書館の事例が見られます！

参加館だけが見ることができる「参加館公開」のデータも参照することができます。

自館用のデータベースとして活用！

公開範囲を「自館のみ」とすれば、組織内でのレファレンス情報の管理・共有ツールとしても利用が可能です。

データベースを活用し館外にアピール

登録データは検索エンジンでもヒットするので、自館のウェブサイトだけで公開するよりもアクセスされる機会が増えます。レファ協の統計機能では各データへのアクセス数も簡単にわかるので、具体的な数値でレファレンスサービスの実績の評価ができます。



事業に参加するには？

「事業の実施要領」および「事業参加規定」をご確認の上、「事業参加申請書」「参加資格を満たすことを示す書類」を提出していただく必要があります。詳しくは、以下のページをご覧ください。

レファレンス協同データベース事業 > 事業に参加するには
<http://crd.ndl.go.jp/jp/library/entry.html>



第11回レファレンス協同データベース 事業フォーラム報告

このように、レファ協のデータは図書館等での調べもの以外にも活用できる、汎用性の高い性格のものになっています。平成27年2月19日に開催した第11回事業フォーラムでは、このようなレファ協データのもつ公共性に着目し、データ登録・公開の推進と市民が利用しやすいデータベースづくりについて議論しました。

第1部 提言

今回のフォーラムは2部構成で、第1部では、猪谷千香氏（ザ・ハフィントン・ポスト・ジャパン記者）、大向一輝氏（国立情報学研究所准教授）、そして小田光宏氏（青山学院大学教授）による、それぞれの専門分野から見た図書館やレファレンス協同データベース事業についての提言がありました。

猪谷氏からは「図書館における情報発信」と題して、ソーシャルネットワークサービスについて、その発展の概略や、図書館における情報発信への活用事例が紹介されました。

大向氏からは「オープンデータと図書館」と題して、諸外国、日本政府、そして各自治体や民間団体のオープンデータに関する多様な取り組みが紹介されました。今後はデータを作り出すこと、あるいはそれを支援することが図書館の仕事になるのではないか、との考えが示されました。

小田氏からは「図書館知の共有：レファ協の公共

性」と題して、レファ協、あるいはレファレンスサービス自体を再考するための視点が提示されました。また、レファ協やレファレンスサービスが公共性を持つためには、利用者の質問に答える直接的なサービスを実施するだけでなく、図書館の持つ知を社会的な利益に結びつけていく必要があるのではないか、と述べました。

第2部 パネルディスカッション

第2部では、片岡則夫氏（清教学園中・高等学校）、中山美由紀氏（東京学芸大学学校図書館運営専門委員会／東京学芸大学附属小金井小学校）、岡崎聡志氏（山口大学図書館）、余野桃子氏（東京都立中央図書館）をパネリストに招いて、パネルディスカッションが行われました。

ディスカッションの前半では、それぞれの館種の図書館の立場から、経験を交えて紹介がありました。はじめに片岡氏は、中学生、高校生の指導経験から、実際の事例を知ることによってレファレンスの敷居を低くする効果があること、生徒に主体的な学びの姿勢があるとレファ協の魅力がよく伝わることを指摘しました。また、高校生でもレファレンス質問を行い、その事例がレファ協に登録されることで、別の誰かの役に立つことができるという事例が紹介されました。

中山氏の発表では、「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」運営の経験をもとに、小規模な図書館が多い学校図書館も事例を集約し、



猪谷千香氏



大向一輝氏



小田光宏氏





レファ協に登録することでより多くのアクセスが得られること、レファ協には「他館種の図書館や学校外からは見えない学校を『見える化』する」効果があると述べられました。

岡崎氏の発表では、レファ協が各参加館にとってのナレッジマネジメントツールにとどまらず、レファレンス記録を開かれた知識へと変えるプラットフォームであるとの意見が示されました。

最後に余野氏は、公共図書館の立場から、よく聞かれる質問への対応や一つの組織内でのレファレンスサービスレベルの均質化へのレファ協の効用について触れる一方、様々な背景を持った方が利用する公共図書館では、情報を公開することに怖さもあると指摘しました。

ディスカッションでは、岡崎氏から「公開するデータを選ぶのではなく、まずはデータを公開し、その後問題のあるものを取り除いていくやり方にすべき」といった、公開に積極的な意見が提示された一方、質問が公開されることへの利用者の抵抗感という課題が余野氏から提起されました。フロアからは「レファレンスサービスの成果は図書館と利用者の共同生産物ではないか」「オープンデータ化するに当たっては、『調べる方法』とレファレンスサービスのプロセスは分けて考えるべきではないのか」といった意見も出されました。

コーディネーターの山崎博樹氏（秋田県立図書館

副館長）によるまとめでは、レファ協データのオープンデータ化は一律にすぐに実現するようなものではなく、事業の参加館がデータごとに利用条件を設定できるようにするといった方法など、どのようにデータを提供していくのかを時間をかけて議論をしていく必要があるとの考えが示されました。

まとめ

レファ協はこの10年間、新規参加館とデータ登録の増加を目指してきた結果、14万5千件のデータを収録するデータベースに育ちました。現在でも参加館数、登録データ数ともに十分とはいえない水準ではありますが、データを蓄積するだけでなく、活用についてもより深く考えなければならない段階にきています。

ここで紹介したように、レファ協で情報を協同して記録していくことで、職員個人の実務経験を組織で使える情報に、組織の持つ有用な情報を社会で使える情報にすることができます。レファレンスサービスをはじめとした図書館の活動やその成果を「見える化」していけるよう、そして、活動の成果を社会で「使える化」していけるよう、国立国会図書館は関係機関と協同してレファ協の事業をさらに推進していきます。

レファ協に興味を持たれた方は、ぜひTwitterアカウントの@crd_tweetやウェブサイトをご覧ください。事業についての質問などありましたら、以下までお気軽にお問い合わせください。

国立国会図書館関西館図書館協力課
協力ネットワーク係

TEL : 0774-98-1475 FAX : 0774-94-9117

URL : <http://crd.ndl.go.jp/>

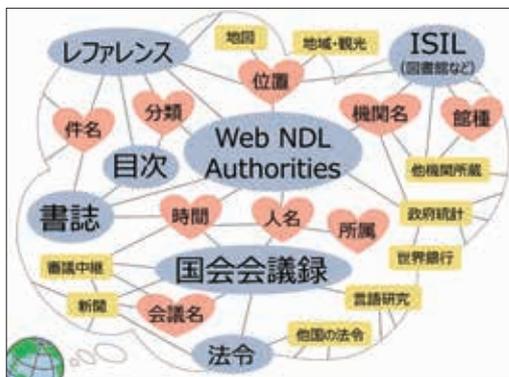
E-Mail : info-crd@ndl.go.jp



未来のウェブにつながる仕事です

こんにちは、電子情報流通課の標準化推進係です。私たちは、国立国会図書館（NDL）が提供するデータをみなさんに使ってもらうための仕組みづくりをしています。

データを使ってもらうためには、使いやすく有意義なものとして提供する必要があります。その方法のひとつが“Linked Data”* - 「リンクするデータ」です。Linked Dataは、人間が絵的な配置や文脈などから読み取っている意味を、機械にもわかるように記述したデータ、またはこのようなデータを実現する方法のことで、未来のウェブにつながる取り組みです。



国や分野を越えるたくさんのデータがリンクすることで、思わぬ発見に至ったり、世の中をより良くすることができたりします。たとえば、イギリスでは自転車事故の発生地点と発生件数と地図のデータをリンクしたことで、ひとびとが自分で安全な道を確認できるようになりま

した。このようなLinked Dataの世界に、海外の国立図書館もぞくぞく仲間入りしています。NDLのデータが仲間入りしたらどんなことが起きるかな、と考えるとわくわくしてきます。

図書館が収集している資料には、人々の「知」が詰まっています。その「知」を整理するために作成しているデータ（書誌情報など）が、ほかのデータともっとリンクできる形になったら、きっと世界をより良くするために役に立つことができ、素敵で面白い未来につながる、そんな気がします。

データの提供と利用を進めるためには、未来の可能性をイメージしてもらう必要があります。そのため、NDLのデータと“Linked Data”の魅力をお話ししたり、活用のアイデアを募るイベントを開催したりしてアピールしています。データに未来を託して、図書館を世界にLink！

（電子情報流通課標準化推進係

Happy Mountain)

* Linked Dataについて、詳しくは以下をご覧ください。
橋詰秋子「なぜ図書館はLinked Dataに取り組むのか
欧米の事例から」『情報管理』58(2), 2015, pp.127-134
<http://doi.org/10.1241/johokanri.58.127>
武田英明「動向レビュー：Linked Dataの動向」
カレントアウェアネス(CA1746)
<http://current.ndl.go.jp/ca1746>

これからの図書館のあり方を 検討するために



図書館利用者の情報行動の傾向及び図書館に関する意識調査

日本でインターネットが普及し始め「インターネット元年」と称される1995年から約20年、インターネットの人口普及率は今や8割を超え、インターネットを利用する端末も、パソコンだけでなく、テレビ、携帯電話、スマートフォン、タブレット端末、ゲーム機等と多様化しています¹。このような情報環境の変化の中で、情報入手の主要なメディアの一つである紙の資料を中心にサービスを提供してきた図書館は、どのようにサービスを展開していけばよいのでしょうか。サービスのあり方を検討する材料となる基礎的な情報を提供するため、国立国会図書館（NDL）は、「図書館利用者の情報行動の傾向及び図書館に関する意識調査」を行いました。

1. 調査の概要

1.1 調査の目的

NDLでは、図書館協力事業の一環として「図書館及び図書館情報学に関する調査研究」事業を行っ

ており、今回の調査もその一つです。

公共図書館の利用者を対象とした、サービスに対する評価のための調査はそれぞれの図書館で広く行われています。しかし、図書館を利用していない人も含む、住民全員を調査対象とした図書館に関する調査は多くはなく、またそれらも特定の地域に限られています²。1979年、1989年に総務省（現在の内閣府に相当）が行った全国調査³、2005年の時事通信社による調査⁴以降、全国的な調査は見当たりません。

一方、テレビ、新聞、本やインターネット等のメディア利用やコミュニケーション行動などの情報行動に関する調査については、毎日新聞社が行っている読書世論調査⁵を始めとした読書調査、また、シンクタンク等による電子書籍に関する調査⁶など、メディアごとに多様な調査がなされています。総務省の社会生活基本調査⁷やNHKの生活時間調査⁸など、国民の生活時間を調べる調査の中からも情報行

1 平成26年度 情報通信白書 第2部 情報通信の現況・政策の動向 第3節 インターネットの利用動向。総務省。http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h26/html/nc253120.html

2 糸賀雅児「わが国の図書館調査」森耕一編『図書館サービスの測定と評価』日本図書館協会、1985、pp. 85-121。

寄藤昂「市民の読書行動と図書館利用に関する研究」『図書館学会年報』28(2)、1982、pp.79-87。

日本図書館協会編『図書館における自己点検・評価等のあり方に関する調査研究報告書 平成14年度文部科学省委嘱調査研究』日本図書館協会、2003。

河村芳行、歳森敦、植松貞夫「広域利用可能地域における世帯レベルの図書館利用行動：札幌市住民調査をもとに」『日本図書館情報学会誌』56(2)、2010.6、pp.65-82。

『図書館サービスに関する市民意識調査報告書』船橋市。http://www.city.funabashi.chiba.jp/kurashi/study/0009/p015502_d/fil/toshokan-ishikichousa.pdf

『読書と図書館利用に関するアンケート』大阪府。http://www.pref.osaka.lg.jp/attach/4982/00048586/HPbunsekityokan.xls

http://www.pref.osaka.lg.jp/attach/4982/00048586/HPenqtosyokan%20.doc 等。

3 読書・公共図書館に関する世論調査（昭和54年9月）。内閣府。http://survey.gov-online.go.jp/s54/S54-09-54-12.html

読書・公共図書館に関する世論調査（平成元年6月）。内閣府。http://survey.gov-online.go.jp/h01/H01-06-01-03.html

4 図書館に関する世論調査。『中央調査報』578号、2005.12、pp.5148-5149
http://www.crs.or.jp/backno/old/No578/5782.htm

5 毎日新聞東京本社広告局編『読書世論調査』毎日新聞東京本社広告局。なお、近年では、2003年版、2006年版、2009年版、2013年版、2014年版の調査において、図書館に関して章を設けて調査が行われている。

6 インターネットメディア総合研究所編『電子書籍ビジネス調査報告書』インプレスビジネスメディア、など多数。

7 平成23年社会生活基本調査。総務省統計局。http://www.stat.go.jp/data/shakai/2011/index.htm

8 生活時間調査。NHK放送文化研究所。http://www.nhk.or.jp/bunken/yoron/lifetime/

動について明らかになる部分はあるでしょう。東京大学大学院情報学環・学際情報学府の橋元良明教授を中心に、1995年から継続的に行われている調査では、日本人の情報行動が数値による裏付けを伴って、実証的に明らかにされています⁹。しかしながら、特定のメディアにとどまらず、幅広い情報行動の文脈の中で、図書館に関する行動を重点的に取り上げた調査は見当たりません。

これからの図書館サービス、特に利用者の範囲が最も広い公共図書館のサービスのあり方を検討していくに当たっては、現在の図書館利用者だけでなく、図書館を利用していない潜在的な利用者も対象として、図書館が果たすべき役割についてのニーズや、図書館利用を含めた広い意味での情報行動の傾向を把握する必要があると考えます。どのような情報行動の傾向をもつ人が、どのように図書館と関わっているのかを探ることが、この調査の目的です。

1.2 調査の役割分担

この調査では、NDL関西館図書館協力課が企画および全体調整を行い、日本図書館情報学会のNDL調査研究協力チームの協力を得て調査票を設計し、楽天リサーチ株式会社にオンライン調査を委託して実施しました。NDL調査研究協力チームは、日本図書館情報学会の特命事項担当常任理事である松林麻実子筑波大学講師を主査とし、池内淳筑波大学准教授、倉田敬子慶應義塾大学教授、歳森敦筑波大学教授を構成員としてこの調査への協力のために組織されました。

1.3 調査対象と調査手法

日本在住の20歳以上の男女を対象として、2014年12月12日（金）から、12月17日（水）まで、オンラインによる調査を実施しました。調査回答の回収数は5,000件です。調査対象者は、楽天リサーチ

株式会社のモニターから、(1) 都道府県を単位に全国を11のブロックに区分した地域、(2) 20代から70代以上まで10歳ごとの6つの年代、(3) 性別、の3つで区分した人口比率が、2014年1月1日現在の住民基本台帳人口（2014年6月25日総務省発表）による20歳以上の日本の人口比率と近似するよう抽出し、割り付けました¹⁰。なお、調査手法としてオンライン調査を採用したこと、また、モニターから調査対象者を抽出したことから、この調査の回答には一定程度の偏りが存在します。

1.4 調査内容

調査項目は、割り付け数の設定に使用した回答者の属性を尋ねる3問（年齢、性別、市区町村までの居住地）を含む、全40問で構成しています。調査内容は、「情報行動の傾向」、「公共図書館の利用状況」、「公共図書館への意識」の3つを中心にしています。なお、地域における公共図書館の価値についての認識を分析するため、居住歴や地域への帰属意識等の地域に関する設問も調査項目として加えています。また、職業、世帯年収、最終学歴、同居者の有無とその種類など、回答者の属性についても尋ねており、様々な観点からの分析が可能となっています。

1.5 成果の公開

この調査では、図書館に関わるさまざまな立場の人がそれぞれの課題認識にもとづいて調査結果を分析できるよう、調査により得られた回答データそのものを公開しています。

⁹ 研究成果～調査研究報告書。IICP情報通信政策研究所。http://www.soumu.go.jp/iicp/chousakenkyu/seika/houkoku-since2011.htmlに掲載された「平成25年 情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査」「平成24年 情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査」、橋元良明編『日本人の情報行動2010』東京大学出版会、2011。他多数。

¹⁰ 調査の過程において、NDLが調査対象者の個人情報を扱うことはありませんでした。

2. 調査結果の概要

ここでは、公共図書館の利用状況と公共図書館への意識、次いで、情報行動における図書館利用との関係といった観点から、調査結果の一部について、その概要を紹介します。

2.1 公共図書館の利用状況

まずは、実際の公共図書館の利用状況を確認しておきます。最近1年間の公共図書館の利用状況を尋ねたところ、「利用した」が40%、「この1年は利用しなかったが、1年以上前には利用したことがある」が36%であり、76%の回答者に利用経験があることがわかりました。この1年間に公共図書館を利用したと回答した人を対象に、さらにその頻度を尋ねたところ、「月に数回程度」(35%)が最も多く、続いて多いのが、「年に数回程度」(31%)でした(図1)。月に1回程度以上の頻度で公共図書館を利用する回答者の割合は、調査対象者全体の27%となります。

公共図書館を利用する主な目的は、「図書館の資料を借りる／返す」が81%、「資料の閲覧」が49%でした。主な目的として「図書館員に支援、情報、示唆をもとめる」を選択した回答はわずか2%でした(表1)。

2.2 公共図書館に期待される役割

それでは、公共図書館の役割はどのように認識されているのでしょうか。ここでは、公共図書館についての意識を探ります。「公共図書館は、読書好きや教養を育むため重要である」とする考えに80%が同意(「非常にそう思う」と「そう思う」の回答を合計。以下同じ)し、「公共図書館では、無料での資料閲覧や、インターネットの利用などができるので、全ての人に平等な機会を与えるのに重要な役割を果たしている」には71%が同意、「公共図書館が近くにあることで、その地域の生活の質が向上する」に66%が同意するなど、おおむね公共図書館の役割を評価する回答が寄せられています(次ページ図2)。図書館の利用状況別に回答の傾向をみると、月に1回程度以上利用するとした層が、特に図書館の役割を肯定的に評価する回答をしていることがうかがえます。例えば、「必要な情報の多くは自分で探せるようになったので、公共図書館は以前ほど必要とされていない」と公共図書館の価値を低く評価する質問に対しては、全体の回答では「全くそう思わない」が13%、「そう思わない」という回答が40%であったのに対し、月に1回程度以上図書館を利用している層では、27%が「全くそう思わない」、47%が「そう思わない」と否定する回答が多く、現在でも公共図

図1 公共図書館の利用状況

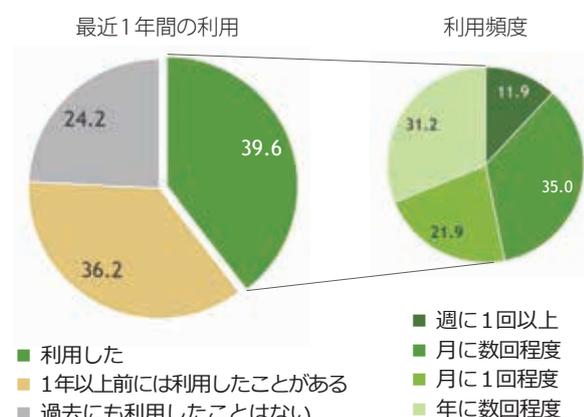


表1 図書館利用の主な目的

目的	割合
図書、視聴覚資料等の図書館資料を借りる／返す	81.0%
図書、雑誌、新聞などを図書館で閲覧する	48.8%
図書館で勉強する／仕事をする	11.9%
子どもの図書館利用につきそう	9.5%
展示やイベントに参加する	6.5%
図書館のパソコンを利用する	3.8%
図書館で録音資料を聞く、ビデオや映画を観る	3.1%
図書館員に支援、情報、示唆を求める	2.1%
研修プログラムに参加する	1.7%
その他	1.4%

書館が必要とされていると、その役割を肯定的にとらえる意識があらわれていました。

2.3 公共図書館の価値認識

公共図書館については、どの程度価値を置かれているのでしょうか。その認識を調べるため、自分の住む地域の公共図書館が閉鎖された場合に、地域にとって好ましくない影響があると思うかどうかを尋ねました。過半数を超える56%が、好ましくない影響がある（「大きな影響がある」と「影響がある」の合計）と回答しました。ただし、自分や家族に

とっての影響を尋ねると、影響があるとした回答は47%であり、影響がない（「あまり影響はない」と「影響はない」の合計）とした45%とほぼ拮抗していました。米国の調査会社Pew Research Centerが行った類似の調査では、地域の公共図書館が閉鎖された場合、90%がコミュニティに影響があると回答し、そのうち63%は重大な影響があると回答しています¹¹。日米の地域、コミュニティにおける公共図書館への価値認識の違いが数字で裏付けられる結

¹¹ How Americans Value Public Libraries in Their Communities. Pew Research Center. <http://libraries.pewinternet.org/2013/12/11/libraries-in-communities/>

図2 公共図書館の役割に関する意識

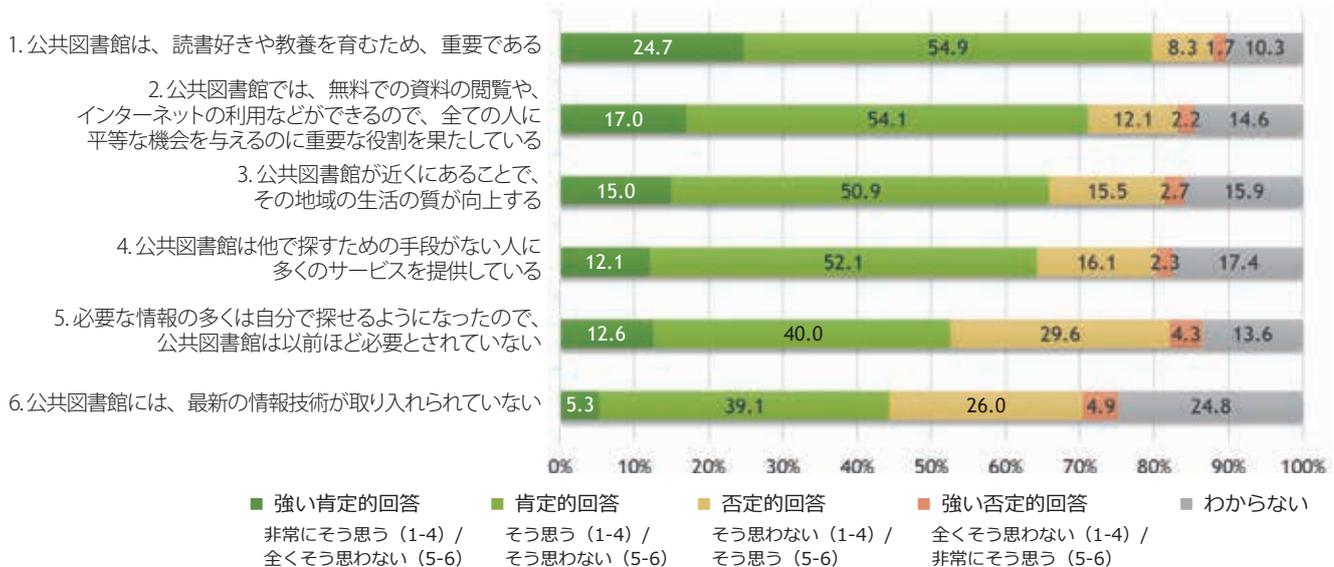
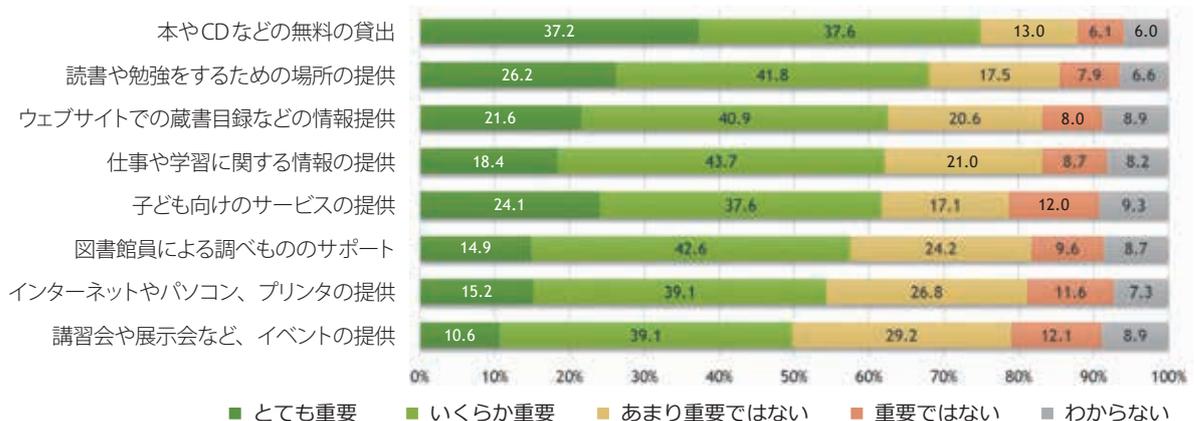


図3 公共図書館のサービスの重要度



果となりました。

2.4 公共図書館で重視されるサービス

公共図書館ではさまざまなサービスが提供されています。図書館を実際に利用している人にその利用目的を尋ねた設問とは別に、全員に対して、公共図書館で提供されているサービスの重要度について、認識を尋ねました。そのサービスを「とても重要」「いくらか重要」とした回答をあわせると、「本やCDなどの無料の貸出」が75%と最も多く、以下、「読書や勉強をするための場所の提供」(68%)、「ウェブサイトでの蔵書目録などの情報提供」(63%)、「仕事や学習に関する情報の提供」(62%)、「子ども向けのサービスの提供」(62%)と続きます(前ページ図3)。「図書館員による調べもののサポート」を重要とする回答は58%でした。回答者の属性でみると、「生徒・学生」が、資料の貸出、情報提供、インターネットなどの提供、場所の提供等に対して、とても重要であると回答する割合が高くなっています。

国立国会図書館の認知度は？

今回の調査では、国立国会図書館を知っているかどうか、知っているとは回答した人には、東京本館、関西館、国際子ども図書館の3つの施設や当館が提供するさまざまなサービスについて、その認知度と利用状況を尋ねています。

国立国会図書館を知っていると回答した人は全体では59%でした。知っているとは回答した人の中で、関東地区での東京本館の認知度(「利用したことがある」、「知っているが利用したことがない」の回答の合計)は84%、近畿地区での関西館の認知度は40%と、設置地区で比較的高くなる傾向にありました。サービスの点では、「公共図書館・大学図書館などを経由した資料の貸出サービス」の認知度は37%、「デジタル化した資料のホームページ上での公開」の認知度は25%でした。必ずしも来館しなくても、多くの方に活用いただけるサービスを提供していることをより広く知っていただくことが当館の課題であるといえます。

2.5 情報行動の傾向：読書傾向

それでは、1年間の読書量はどの程度なのでしょう。紙の本は冊、電子書籍はタイトルを単位として読書状況を尋ねています。調査の結果、紙の本を1年間に1冊も読まなかった人は26%、電子書籍を1タイトルも読まなかった人は82%でした。紙の本、電子書籍のいずれにおいても、回答者の職業別では「生徒・学生」が、世帯年収別では、世帯年収が高い層ほどよく読書を行うという傾向が見受けられます。なお、紙の本の入手方法を尋ねた質問に「図書館で借りる」を選択したのは全体では31%でしたが、職業別でみると、「生徒・学生」が46%、「退職者」「家事専業」がいずれも39%と高い傾向が見られます。

2.6 情報行動の傾向：メディア別の情報行動

テレビや新聞、インターネット等のメディア別に、情報入手の頻度を尋ねました。オンライン調査という手法による回答の偏りには留意が必要ですが、毎日1回以上行うとする回答が多かったのは、「インターネットの閲覧・検索」(96%)、「テレビの視聴」(81%)でした。また、対面での会話、電話、メールやソーシャルメディアなど、メディア別のコミュニケーション行動の頻度についても尋ねています。毎日1回以上行うとする回答には、「ウェブサイトを見る」(82%)、「友人・知人・家族と会話する」(78%)、「メールを読んだり送ったりする」(74%)が高くなっています。「電話をする」は36%で、全体として、電話よりもメールがよく利用されているという傾向が見受けられます。メディア別の情報行動については、全般的に、回答者の図書館利用の状況による違いはあまり見られませんでした。

2.7 情報行動の傾向：情報ニーズと実際の検索行動

どのような情報に対してどの程度ニーズを感じており、また、実際にどの程度検索を行ったのかにつ

いて尋ねました。「政治や時事に関するもの」「ビジネスや経済に関するもの」等10種類のニュースや情報について、それらを得たいと思ったことがあるかどうかを尋ねています。10の下位設問すべてをあわせて、なんらかの情報を得たいと思ったことが「よくある」とした回答は25%でした(表2)。さらに、何らかの情報を得たいと思ったことが「よくある」、「ある」、「あまりない」と回答した人の中で、実際に探した頻度を尋ねたところ、月に1回以上の頻度で探したとする回答は、66%でした(表3)。この設問では、「探す」手段までは問うていませんが、情報のニーズを感じていても、実際にそれを探すという行動に移す人が大半を占めるわけではないことがうかがえます。図書館の利用頻度との関係でみると、図書館を月1回以上利用している人は、それぞれの

情報・ニュースを得たいと思ったことが「全くない」とする回答が低く、同様に、ニュース・情報を実際に探すことについて、「全く行わなかった」とする回答も低い傾向にありました。図書館をよく利用する人には、情報に無関心な人が少ないことが示唆されます。

2.8 情報行動の傾向：文化・スポーツ活動等の習慣

また、文化・スポーツ活動等の習慣についても尋ねています。その回答を図書館の利用頻度別にみると、週に1回以上図書館を利用する層では、全体と比較して、「博物館・美術館・史跡などを訪れる」、「コンサート、演劇などを観に行く」、「本屋に行く」といった活動を「よく行う」と回答する割合が高く、図書館を積極的に利用する層が、文化活動も熱心に行っている様子がうかがえます(図3)。

表2 ニュース・情報の取得意向

取得意向	割合
よくある	25.0%
ある	45.6%
あまりない	24.3%
全くない	5.1%

表3 ニュース・情報の実際の検索頻度

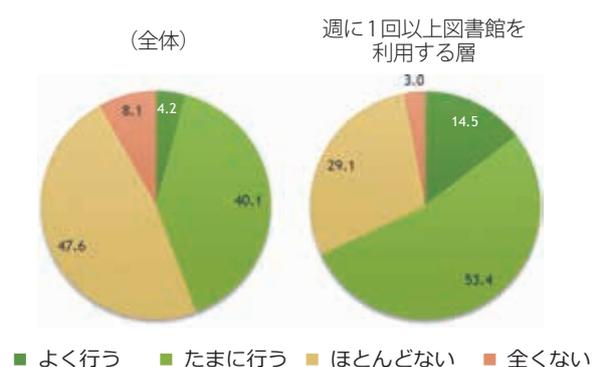
検索頻度	割合
週に1回以上行った	25.4%
月に数回程度行った	24.5%
月に1回程度行った	16.2%
年に数回程度行った	17.1%
この1年間には一度も行わなかったが、過去に行ったことはある	9.1%
全く行わなかった	7.7%

3. 成果の公開について

ここで紹介した調査結果の概要は、調査回答データのごく一部の単純集計およびクロス集計から得られた結果でしかありません。この調査では、多様な観点からのより詳細な分析や、他のデータとの比較分析などにより、さまざまな知見が得られる可能性のある、幅広い回答データが得られています。そこで、調査により得られた回答のデータそのもの、調査結果の集計表¹²、簡易な集計レポート、調査に使用した質問をまとめた調査票を、カレントアウェアネス・ポータルで公開しています¹³。図書館政策を立案する人、図書館を運営する人、実務を担当する人、図書館情報学研究者の皆さまに、それぞれの立場や課題認識の観点から、この調査結果を活用してより詳細な分析を行っていただき、今後の図書館のあり方の検討に活かしていただくことを期待しています。

(関西館図書館協力課)

図3 博物館・美術館・史跡などを訪れる習慣



子どもの有無と図書館

(同志社大学助教／国立国会図書館関西館図書館協力課非常勤調査員 佐藤翔)

「図書館利用者の情報行動の傾向及び図書館に関する意識調査」のデータ（以下、本データ）活用の一例として、子どもの有無と図書館・メディア利用の関係を本データから分析してみました。

年齢と公共図書館の利用の関係としては、小学生時の図書館利用が最も多く、年齢を重ねるとともに利用が減っていく、しかし子を持つ親になると、子どもを図書館に連れて行くために再び図書館の利用が増える、と言われていました。

この傾向は本データからも裏付けられます。図1は30代の回答者806人について、子どもの有無と2014年の図書館利用経験の関係をグラフに示したものです。子を持つ回答者は持たない回答者に比べ、2014年中の図書館利用者の割合が10%も多くなっています。この差はそのまま「過去に利用したことはある」人の割合の差です。図書館を利用したこと自体がない人の割合に差はありません。子どもができたことで、過去に使っていたものの最近では図書館から離れていた人が、再び図書館を訪れるようになったと推察されます。

これだけなら既知の事実の確認です。本データが面白いのはこの先で、同じ人々の、その他の情報行動も分析することができます。例えば図2は同じく30代の回答者の、子どもの有無と、「本を読む」頻度との関係を見たものです。図書館利用の場合とは逆で、子を持つ回答者の方が、本を読んで「いない」傾向があります。その他のメディア利用も見ると、テレビや新聞、インターネット等の利用には差がない一方、音楽鑑賞や映画など、

一人で没入して楽しむようなメディアは、本と同じく子どもがいると利用しない傾向がありました。

親になると子どもを図書館に連れて行くために図書館の利用は増えるものの、ただ連れて行くだけで、本を読むわけではないのです。その理由として、メディア利用の傾向から、親は一人で本を読む時間を持たずにいることも見えてきます。図書館によく来ているのに自分のためには利用できないという、特徴ある利用者像が浮かび上がってきました。

これをさらに回答者の性、職業、本人の年齢、子の年齢、図書館への交通手段などの観点も加えて分析していくことで、利用者像の理解がより深まっていきます。もちろん子どもの有無以外にもいくらかでも観点はあります。このように本データは、利用者理解につながる、多くの可能性を持っているのです。

図1 子どもの有無と2014年の図書館利用（30代、N=806）

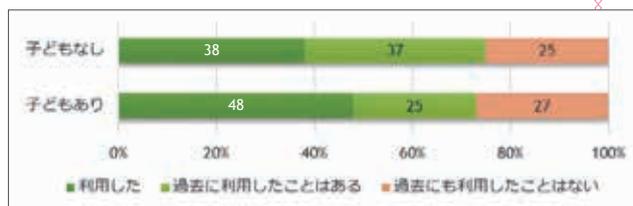


図2 子どもの有無と本を読む頻度(30代、N=767 図1との差は無効回答による)



12 (1) 単純集計、(2) 全国を11に区分した地域、性別および年代、都市規模（指定都市・特別区、中核市、特例市、その他の市町村）、職業、世帯年収の5つの属性別のクロス集計、(3) 質問項目間のクロス集計

(11件)の3種類を公開している。

13 http://current.ndl.go.jp/FY2014_research

世界図書館紀行

オーストラリア ビクトリア州立図書館 本田 伸彰

2014年10月上旬、筆者は、オーストラリアのメルボルンで開かれた「第11回電子情報保存に関する国際会議」(11th International Conference on Digital Preservation; iPRES2014)に参加する機会を得た。デジタル化した資料やウェブサイトなど電子的な情報を、長期にわたり保存し、その利用を保証することは世界的な課題となっている。各国の先進的な取り組みが紹介された会議は大変刺激的であったが、会場となったビクトリア州立図書館の美しさもまた、図書館員として大いに興味をひかれるものであった。

メルボルンの街並みとともに、同図書館の概要、会議の合間に覗き見た館内の様子について紹介したい。



緑が多いメルボルの街並み

メルボルンは、オーストラリアの南東部に位置するビクトリア州の州都で、ポートフィリップ湾に面する港湾都市として発展してきた。シドニーに次ぐ、オーストラリア第二の都市で、ビクトリア州の人口約587万人(2014年)のうち、約444万人がメルボルン都市圏に暮らしている¹。

1日のうちに四季があるといわれるほど、天候は移ろいやすい。訪問した10月上旬は春先にあたるが、朝に雨が降ったかと思えば、昼には晴れて汗ばむような陽気となり、夜に日が落ちれば上着を着ても肌寒さを感じるという具合であった。

市街地にも大きな公園が点在し、緑を目にする機会も多い。ビクトリア州立図書館に近いカールトン庭園 (Carlton Gardens) には、1880年の万国博覧会開催時に建てられた王立展示館が残されており、庭園とあわせて、ユネスコの世界遺産 (文化遺産) に登録されている (写真1)。街の中心部の南側には、観光用のクルーズ船も運航されるヤラ川が流れている。川沿いは再開発が進み、遊歩道も整備されジョギングや散歩を楽しむ市民の姿も多く見られた (写真2)。

市内には、路面電車が縦横無尽に走っており、その総延長は250km、停留所の数は1700を超える²。中心部を循環するシティサークルトラムは無料で乗車することができ、観光客の利用も多い (写真3)。これらの都市基盤や充実した医療体制などが評価され、英国のエコノミスト誌から、世界で一番住みやすい街に選ばれている。

街中では、ファストフードのチェーン店やカフェはもちろんのこと、移民も多いためか、アジアを始め世界各国の料理を味わえるレストランが軒を連ねる (写真4)。また、1878年から続くクイーンビクトリアマーケットは、

メルボルン市民の台所で、畜産物や魚介類、色とりどりの果物や野菜を売る店舗が所狭しと並び、食の豊かさを実感することができる (写真5,6)。マーケット内や周辺には早朝から開いているカフェも多く、朝食をとるには最適で、筆者も会議期間中、毎日のようにお世話になった。

歴史を感じさせる重厚な外観

東西南北に、碁盤の目のように通りが走る街の中心部は、ビジネスの中心街という意味でCBD (Central Business District) と呼ばれている。CBDには、大英帝国時代の重厚な建物も多く残っており (写真7,8)、そのうちの1つが、今回訪問したビクトリア州立図書館である。

ビクトリア州立図書館は、オーストラリア

¹ オーストラリア統計局ホームページ <http://www.abs.gov.au/websitedbs/D3310114.nsf/home/Home?opendocument>
² ヤラトラム社ホームページ <http://www.yarratrams.com.au/>



で最も古い公共図書館で、メルボルン市庁舎や王立展示館（前出）も手掛けた当時の名建築家ジョセフ・リード（Joseph Reed）の手によって設計され、1856年にオープンした。オープン後も増改築を繰り返し、現在では、全体が23の建物で構成され、その規模は街の一区画を占めるほどである。

中央部には、1913年に完成したドーム型の建物の上部が頭をのぞかせている。また前面には、古代ギリシャの神殿を思わせる石造りの柱が並び、建物に向かって緩やかに傾斜する前庭には芝生が敷かれ、市民の憩いの場となっている（写真9）。

正面入口の重い扉を開いて中に入ると、絶えず人が行き交うホールがあり、警備員のいるゲートを通りすぎると、閲覧スペースに入ることができる。

多彩な閲覧スペース

ゲートを抜けると、最初に入るのが外部か

らも目立つドーム型の建物で、その3階には、ビクトリア州立図書館の象徴ともいえるラトローブ閲覧室（La Trobe Reading Room）がある（写真10）。この閲覧室の建設にあたっては、大英博物館や米国議会図書館も参考にされたという。建物は6階建てであるが、閲覧室の上部は、天井まで吹き抜けとなっている。中心から放射線状に、約20人が座れる机が8卓。その放射線状の机の間に6人掛けの机が3卓ずつあり、約300人が着席できるほどの広さがある。年季が入った木製の椅子や、空間にアクセントをもたらす緑色のシェードのランプなど、閲覧室そのものが芸術作品であるかのような趣がある（写真11）。閲覧室を取り囲む書架は、総延長が27kmに及ぶとされ、オーストラリアの歴史や地理、文学、人類学などをテーマにした資料のほか、特に、ビクトリア州に関連した資料が排架されている（写真12）。

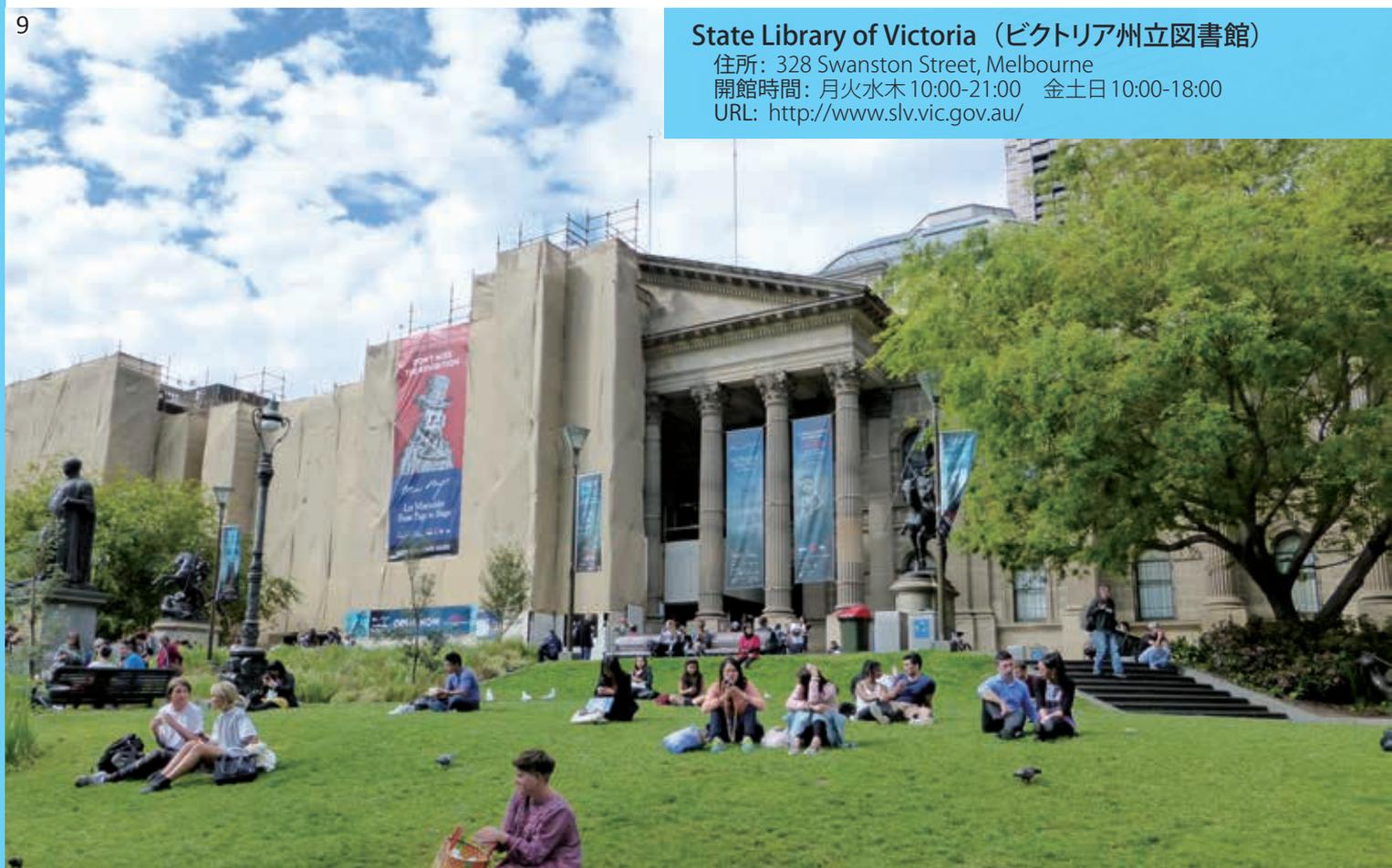
ラトローブ閲覧室を通り抜けると、目録検

State Library of Victoria（ビクトリア州立図書館）

住所: 328 Swanston Street, Melbourne

開館時間: 月火水木 10:00-21:00 金土日 10:00-18:00

URL: <http://www.slv.vic.gov.au/>





索やインターネット閲覧用のPC端末が並ぶレドモンドバリー閲覧室 (Redmond Barry Reading Room) がある (写真13)。以前は、動物の剥製なども展示された産業技術博物館として利用されていたが、改装され、2004年に閲覧室としてリニューアルオープンし、雑誌の閲覧室なども設けられた (写真14)。

館内の専門的な資料室としては、新聞閲覧室や家系の歴史を調べることができる系図センター (Genealogy Centre)、音楽資料を利用できる芸術作品閲覧室 (Arts Reading Room) などがある (写真15)。また、チェスルーム (Chess Room) は文字通りチェスにまつわる資料を集めた部屋で、1483年に出版された指南書なども展示されている。チェス盤も置かれ、実際にゲームに興じている利用者もいる (写真16)。

なお館内では、ラトローブ閲覧室やチェスルームなど4つのスペースを、静寂を保つための部屋 (Quiet Room) としており、携帯電話の電源を切るかサイレントモードに切り替えることが求められる。一方で、レドモンドバリー閲覧室などは、グループ学習や会話に適したスペースとして案内することで、館内の環境維持に努めている。

美術館顔負けのギャラリースペース

ビクトリア州立図書館では、図書や雑誌などのほかに、ビクトリア州の歴史や人々の暮らし、過去の偉人などをモデルにした絵画や写真など芸術作品を数多く所蔵しており、館内にキースマードックギャラリー (Keith Murdoch Gallery)、コーウェンギャラリー (Cowen Gallery)、ドームギャラリー (Dome Galleries) という3つの展示スペースを備えている。

正面入口のホール右手にあるキースマードックギャラリーは、期間限定の企画展など



に利用される。筆者の訪問時には、19世紀フランスの文豪ヴィクトル・ユゴーにまつわる展覧会が開催されていた(写真17)。フランス国外に初めて持ち出されたという、代表作「レ・ミゼラブル」の直筆原稿のほか、日本を含め各国で上演された「レ・ミゼラブル」のミュージカルのポスターや記念グッズなども展示されていた。この企画展は有料で、プレイガイドのホームページなどからもチケットを購入できるようになっていた。

図書館の建物全体の中心に位置するコーウェンギャラリーは、メインギャラリーと、それに隣接する2つの部屋のレッドロタンダ(Red Rotunda)とブルーロタンダ(Blue Rotunda)で構成されている。

メインギャラリーには、大小さまざまな油絵などオーストラリア芸術を代表する作品が

並び、思わず図書館にいることを忘れてしまいそうになる(写真18)。レッドロタンダには、ビクトリア州の歴史上の重要人物の肖像画や胸像が飾られている(写真19)。一方、ブルーロタンダは、期間限定の展覧会に利用されており、訪問中には、絵本の原画展が開催されていた。筆者が覗いたときには、会議終了後の夕方遅い時間帯であったため子どもらの姿を見ることができなかったが、靴を脱いで作品を鑑賞するスペースもあり、くつろいだ雰囲気となっていた(写真20)。

また、ラトロブ閲覧室が入るドーム型の建物の4、5階に、閲覧室を取り囲むように設置されているドームギャラリーにも、稀覯本の展示コーナーや、ビクトリア州の歴史上の出来事にまつわる作品などを展示するコーナーがある(写真21)。





デジタル化も進む所蔵資料

ビクトリア州立図書館では、200万冊以上の図書、1.6万タイトルの雑誌のほか、写真、絵画、地図、手稿本、パンフレット類なども所蔵している。ビクトリア州のほとんどの出版物は、連邦政府の著作権法とビクトリア州の図書館法により、キャンベラにある国立図書館とビクトリア州立図書館に納めることが義務付けられている。

所蔵資料の中には、メルボルン最初の居住者の1人とされるジョン・バットマン (John Batman) の手記 (1835年) や、ビクトリア州最後の山賊といわれるネッド・ケリー (Ned Kelly) が着ていた甲冑、大陸縦断を目指す探険の途中で隊員の多くが亡くなったバーク・ウィルズ (Burke and Wills) 探険隊の隊員の遺言書などもある。

資料のデジタル化にも積極的で、1993年から現在までに、写真や地図、19世紀のパンフレットなど50万点を超える資料をデジタル化している。今回、会議の参加者を対象に館内ツアーが開催され、資料をデジタル化するための作業部屋も見学することができた (写真22)。

利用者へのサービスについて

ビクトリア州立図書館では、国立国会図書館と同じく、一般利用者への資料の貸出しは行っていない。ただし、登録利用者になれば書庫内の閉架資料も請求して利用することができ、ビクトリア州内であれば自宅から電子雑誌や新聞、電子書籍を利用することができる。また館内では、無線LANを介してインターネットへの接続も可能である。なお、館内にはノートパソコンや筆記具、教科書などは持ち込むことができるが、傘や大きなかばん、飲食物 (ボトル入りの飲料水を除く) は、入口ホール横のロッカーに入れておく必要が

ある (写真23)。

このほかのサービスとして、電話やオンラインでのレファレンスを受け付けているほか、図書館員にチャットで質問することもできる (月-金 10:00-18:00)。また、ビクトリア州内の公共図書館に対しては、図書館間貸出しを実施しているほか、公共図書館から寄せられた質問や問い合わせに対し、平日だと、その日のうちに回答する体制をとっている。

結婚式も挙げられる図書館

ビクトリア州立図書館の来館者数は、年間170万人を超える。多くの来館者に対応するため、前述した以外の施設やサービスも充実したものとなっている。

正面入口のホール左手には、メルボルン市内に5店舗を展開する書店「リーディングス」(Readings) が入っており、新刊書や児童書、CDやDVD、ビクトリア州立図書館が発行した図書等を販売している (写真24, 25)。店の規模はそれほど大きくないものの、文具や辞書類など、自習学習にすぐ使える商品が目についた。

また館内には、初代図書館長³の名が由来となったカフェ「Mr Tulk」があり、軽食を取ることもできる (写真26, 27)。外部から直



³ Augustus Henry Tulk
(在任期間:1856-1873年)

接アクセスできる北側の入口は、大通りのラトローブ通りに面しており、屋外にも席が設けられている。図書館の利用者でなくても、街歩きの途中で気軽に立ち寄ることができるようになっている。

筆者の参加した会議が開かれたカンファレンスセンター（写真28：入口）は、約200人が座れるホール（写真29）のほか、5つのセミナーームを備えている。また、かつての中庭は、現在屋根に覆われているものの自然光が差し込む明るい空間で、子どもの遊び場のほか、多目的なスペースとして利用されている（写真30）。

さらに図書館内では、結婚式も挙げることができる。開館直後の1859年に完成したクイーンズホール（Queen's Hall）（写真31）や前述のレッドロタンダなどを披露宴の会場として利用し、50人から520人までの招待客に

対応することができるという。

また、「図書館の友」（a Friend of the Library）という会員制のサポート制度があり、年間85豪ドル（約8,500円）の会費を支払うことで、会員専用ラウンジの利用や会員向けイベントへの参加といった特典のほか、図書館内のカフェや書店での割引を受けることができる。

おわりに

ビクトリア州立図書館の正面入口は、メルボルン市街を南北に貫く目抜き通りのスワントン通りに面し、郊外からの列車も乗り入れる地下鉄のメルボルンセントラル駅の向かい側にある。周辺にはショッピングモールや大学があり、人通りが絶えない。通りから直接进入するカフェや寝転んでくつろげる前庭の芝生もあり、開かれた図書館という印象を強く受けた。

また、増改築を繰り返し、新旧織り交ぜた建物は、時間を重ね、知識を積み上げてきた図書館の歴史そのものようであった。その館内では、学生服を着た10代と思われる利用者の姿が目立った。資料を読み込む利用者の隣でスマートフォンの操作に夢中な利用者がいる光景は万国共通のようであるが、若い世代の利用者が、重厚な建物の中にも活気をもたらしていることは間違いないであろう。

今回は、会議の合間に垣間見たにすぎなかったが、メルボルンは改めて訪問してみたいと思わせる魅力的な街であり、そこに建つビクトリア州立図書館もまた、魅力的な図書館であった。

なお、本稿の執筆にあたり、ビクトリア州立図書館の皆様にご多大なご厚意を賜った。この場を借りて、御礼申し上げる。

（ほんだ のぶあき 関西館電子図書館課）



本屋に ない本

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

The Leica

ライカの100年

日本カメラ博物館運営委員会 編 日本カメラ博物館 刊
2013.10 84p 24×25cm <請求記号 PE33-L3>

本書は、ライカの原型である「ウル・ライカ (UR-Leica)」が誕生してから100年になったのを記念して、日本カメラ博物館が開催した展覧会「The LEICA～ライカの100年」の図録である。

開発の歴史、さまざまなエピソードとともに、貴重な実物の写真が、初期のものから最新機種に至るまで、年代順、形式別に掲載されており、巻末のシリアルナンバー表とともに、ライカの実物と比べたときに製造された時期が特定できる資料としても有用である。

なぜライカは愛されつづけるのか。本書から考えられる理由を3つ挙げてみると、まず技術的信頼性、次にライカにまつわるエピソードの豊かさ、そしてブランドとしての高級さ、といえそうである。

本書によれば、オスカー・バルナック (Oskar Barnack) によって試作されたライカは、その後、「フォーカルプレキシッター」や距離計を装備し、ファインダーの改良を繰り返すなど、その数々の発明は米国特許を取得してきた。とくに「M3」型は世界のカメラ産業に大きな影響を与えたという。

また、本書では、写真家木村伊兵衛がライカを使うことになったきっかけや、大正から昭和にかけてライカの紹介と普及に貢献した吉川速男の活動を紹介している。

そのほかにも、昭和12 (1937) 年に爆発事故を起こした飛行船「ヒンデンブルク号」から発見され

た焼けたライカや、昭和19 (1944) 年のレイテ沖海戦で日本兵の一人が所有し、沈む空母から脱出、救助されるまでの間、文字通り「太平洋を泳いだ」ライカの実物が、日本カメラ博物館所蔵の書籍、カタログとともに紹介されている。



その一方、ライカ・カメラ社と相互協力関係にある報道写真家集団マグナム・フォト (Magnum Photos) や、ベトナム戦争の報道でライカを使用して、ピューリッツァー賞を受賞した沢田教一の名前は意外にも見受けられない。これは本展示が実物に即したメカニカルな側面をクローズアップしたためなのだろうか。

「ライカ1台、家1軒」という伝説にも検証が試みられており、大正13 (1924) 年当時の旧東京市内外の坪単価と比較して、市外の1坪が同額になる場所もあるということである。昭和に入ってからと比較でも、舶来カメラは国産品とはひと桁、ふた桁も金額が違う高級品であった。

近年では、ネガを現像に出すことが少なくなり、撮ったそばからデジタル・カメラのデータを取捨選択して整理できるようになった。しかし、それでもカメラ好きにとって、ライカはいつか手に入れ、首から下げ、手のひらに包みたくなるようなカメラ、まさに“The LEICA”なのである。

(収集書誌部外国資料課 吉原 努)

※入手に関するお問い合わせ先
日本カメラ博物館 電話 03 (3263) 7110

国立国会図書館の平成27年度予算

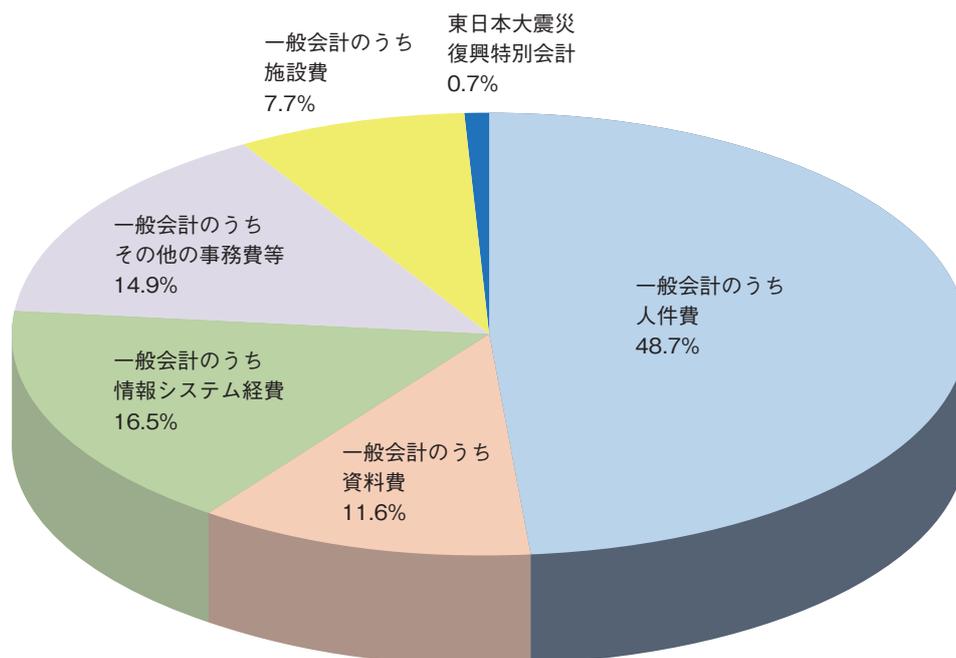
国の平成27年度予算が平成27年4月9日に成立しました¹。当館の平成27年度歳出予算は、一般会計予算と東日本大震災復興特別会計予算から構成されており、総額は201億7,848万7,000円です。このうち一般会計の歳出予算額は200億3,512万1,000円です。前年度の当初予算額と比較すると、退職予定者の増にともなう職員人件費の増額等により、約5億2,500万円の増額となりました。また、東日本大震災復興特別会計の歳出予算額は1億4,336万6,000円です。

平成27年度予算のおもな内容は次のとおりです。

1 国際子ども図書館新館の開館・運営

国際子ども図書館では、児童書のナショナルセンターとしての機能向上、子どもの読書活動のさらなる推進を目的として、子ども向け閲覧室の拡充、研究図書館機能・研修機能の改善、書庫の増設等を内容とする新館建築工事を行っています。

新館は、平成27年度中に竣工・開館する予定であることから、新館開館にともなう備品購入や新館の維持管理経費として、約1億6,300万円が一般会計に計上されました。



予算の費目別構成比（平成27年度）

2 サービス・業務統合システムの更新等

統合システムは、資料の収集、整理から利用者サービスの提供まで、広く当館の業務を支える基幹システムです。

このシステムで使用している機器の更新と、システムの運用等を行うための経費として、約15億4,100万円が一般会計に計上されました。

3 施設整備

(1) 国際子ども図書館の拡充整備

平成23年度から行われてきた国際子ども図書館の新館建築工事は、平成27年度が最終年となります。また、明治39年に建設された既存棟についても老朽化が進んでいることから、保全工事を予定しています。これらの工事費として、約8億4,100万円が一般会計に計上されました。

(2) 関西館第2期施設整備設計

東京本館および関西館の書庫が平成31年度末に満架を迎える見込みとなっていることへの対応として、関西館に書庫施設の建設を予定しています（第2期施設整備）。平成27年度予算では、設計の3か年計画の3年目として、約6,900万円が一般会計に計上されました。

(総務部会計課)

(単位：千円)

一般会計及び特別会計総額 20,178,487

一般会計

(項) 国立国会図書館	18,487,204
人件費	9,820,929
国立国会図書館共通経費	165,266
国会サービス経費	260,672
資料費	2,331,762
うち納入出版物代償金	390,249
情報システム経費	3,336,989
東京本館業務経費	1,412,608
国際子ども図書館業務経費	327,952
関西館業務経費	831,026
(項) 国立国会図書館施設費	1,547,917
国際子ども図書館新館建築工事	479,754
国際子ども図書館既存棟保全工事	361,527
関西館第2期施設整備設計	69,313
東京本館庁舎整備費	549,867
関西館庁舎整備費	87,456
計	20,035,121

東日本大震災復興特別会計

(項) 国立国会図書館	143,366
情報システム経費	143,366
計	143,366

1 平成27年4月1日から4月9日までの9日間は、暫定予算により措置。

法規の制定

【規則第1号】 国立国会図書館組織規則の一部を改正する規則

(平成27年3月24日制定)

利用者が来館した施設において行う国立国会図書館の他の施設（東京本館にあっては関西館を、関西館にあっては東京本館および国際子ども図書館をいう。）の資料に係る証明の申請に関する事務を、東京本館においては利用者サービス部サービス企画課および利用者サービス部サービス運営課、関西館においては関西館文献提供課の所掌とした。あわせて、電子版博士論文の整理に関し、所要の規定を整備した。平成27年4月1日から施行された。

【規則第2号】 国立国会図書館展示会出品資料貸出規則の一部を改正する規則

(平成27年3月26日制定)

国立国会図書館展示会出品資料貸出規則（昭和61年国立国会図書館規則第10号）に定める様式について、所要の整備を行った。平成27年4月1日から施行された。

【規則第3号】 国立国会図書館組織規則の一部を改正する規則

(平成27年4月13日制定)

国際子ども図書館における展示および児童書に関する電子展示会に関する事務を国際子ども図書館企画協力課から国際子ども図書館資料情報課に移管した。平成27年4月13日から施行された。

【規程第1号】 国立国会図書館職員定員規程の一部を改正する規程

(平成27年4月22日制定)

国立国会図書館職員（館長、副館長、退職者、派遣国会職員、育児休業をしている職員、配偶者同行休業をしている職員および非常勤職員を除く。）の定員を887人から886人とした。平成27年4月22日から施行され、同月1日から適用された。

これらの法規による改正後の国立国会図書館職員定員規程（昭和33年国立国会図書館規程第1号）、国立国会図書館組織規則（平成14年国立国会図書館規則

第1号) および国立国会図書館展示会出品資料貸出規則は、国立国会図書館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>) >国立国会図書館について>関係法規 (<http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/laws/>) に掲載している。

第25回納本制度審議会



3月25日、第25回納本制度審議会が、審議会委員11名および専門委員3名が出席して、東京本館で開催された。

審議会では、まず、「オンライン資料の補償に関する小委員会」における調査審議の経過について福井健策小委員長から報告が行われ、質疑応答があった。また、事務局から、代行納入機関により実施されている納入漏れ防止措置の実施状況とその効果について報告し、質疑応答があった。

審議会に関する情報は、以下のページに掲載している。

国立国会図書館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>) >国立国会図書館について>納本制度審議会 (<http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/deposit/council/>)

納本制度審議会委員・専門委員名簿(五十音順 敬称略)(平成27年3月25日現在)

会 長	中山 信弘	明治大学特任教授、東京大学名誉教授
会長代理	山本 隆司	東京大学大学院法学政治学研究科教授
委 員	石崎 孟	一般社団法人日本雑誌協会理事
	植村 八潮	専修大学文学部教授
	遠藤 薫	学習院大学法学部教授
	相賀 昌宏	一般社団法人日本書籍出版協会理事
	角川 歴彦	株式会社KADOKAWA取締役会長
	斉藤 正明	一般社団法人日本レコード協会会長
	白石 興二郎	一般社団法人日本新聞協会会長
	永江 朗	公益社団法人日本文藝家協会電子書籍出版検討委員会委員長
	野原 佐和子	慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科特任教授
	福井 健策	弁護士
	藤井 武彦	一般社団法人日本出版取次協会会長
	藤本 由香里	明治大学国際日本学部教授
	湯浅 俊彦	立命館大学文学部教授
専門委員	片寄 聡	一般社団法人日本雑誌協会著作権委員会委員長
	佐々木 隆一	一般社団法人電子出版制作・流通協議会監事
	三瓶 徹	一般社団法人日本電子出版協会事務局長

○オンライン資料の補償に関する小委員会所属委員・専門委員

福井健策(小委員長)、植村八潮、永江朗、山本隆司、湯浅俊彦、片寄聡、佐々木隆一、三瓶徹

お知らせ

■ 新刊案内 国立国会図書館の 編集・刊行物



レファレンス 771号 A4 108頁 月刊 1,000円(税別) 発売 日本図書館協会
二院制の意義ならびに参議院の独自性—国会の憲法上の位置付けから見た論点
整理—

オリンピックの経済効果を地方にまで波及させた英国—東京オリンピックに対
する懸念の解消に向け—

ベトナムの海外労働者送出政策及びシンガポールの外国人労働者受入政策

アメリカの法人税改革をめぐる議論—税率水準と課税ベースの在り方を中心に—
(資料)

入手のお問い合わせ

日本図書館協会

〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14 電話 03(3523)0812

C O N T E N T S

- 02 <Book of the month - from NDL collections>
 A collection of prize-winning designs for theater drop curtains: a trinity of practicality, craftsmanship, and advertising
- 04 Visualizing libraries—The Collaborative Reference Database Project
- 13 For shaping the future of libraries: The survey on the trend of information behavior and the awareness of public libraries
- 20 Travel writing on world libraries: Australia, State Library Victoria
- 28 NDL budget for FY2015
- 12 <Tidbits of information on NDL>
 Our job is to connect with the web of the future
- 27 <Books not commercially available>
 ○ *The Leica : Raika no 100nen*
- 30 NDL NEWS
 ○ Rules & regulations
 ○ 25th meeting of the Legal Deposit System Council
- 32 <Announcements>
 ○ Book notice - Publications from NDL

国立国会図書館月報

平成 27 年 6 月号 (No.650)

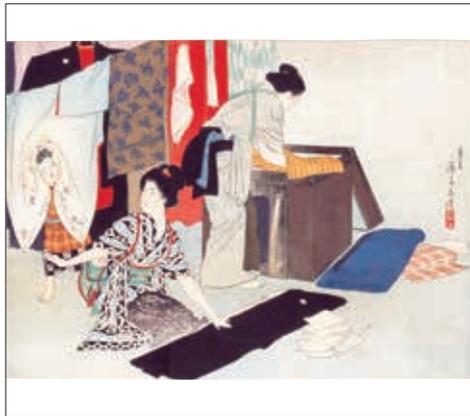
平成 27 年 6 月 1 日 発行

発行所 国立国会図書館
 編集者 小寺 正一
 責任者

印刷所 株式会社 正文社印刷所

〒 100-8924 東京都千代田区永田町 1-10-1
 電話 03 (3581) 2331 (代表)
 F A X 03 (3597) 5617
 E-mail geppo@ndl.go.jp

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。
 本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。
 本誌 517 号以降、PDF 版を当館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>) > 刊行物 > 国立国会図書館月報でご覧いただけます。



『日用百科全書 第6編 衣服と流行』 口絵 富岡永洗 画
大橋又太郎 編 博文館 明治28 (1895) 年 1冊 23cm
「国立国会図書館デジタルコレクション」でご覧になれます
(モノクロ画像)

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/848563/9>

国立国会図書館月報

平成27年6月1日発行 (毎月1回1日発行)
(6月号通巻650号)